

御宿町合併 60 周年記念

御宿ふるさと民話



御 宿 町

御宿町合併60周年記念

御宿ふるさと民話



「海女の群像」岩瀬禎之写真集より

刊行のことば

一九五五年（昭和三十年）に御宿町と浪花村の一部（岩和田地区）と布施村の一部（上布施、実谷、七本地区）が合併し、新しい御宿町が誕生してから六十周年を迎えました。

この六十周年を記念する事業としての公募により、ご提案をいただき「御宿のふるさと民話」として、昔から語り継がれる、どこか懐かしい民話と御宿にまつわる歴史上のお話を一冊の本にまとめました。

一六〇九年（慶長十四年）人類愛に満ちた海難救助、白い砂浜が生んだ大正ロマンを彷彿とさせる、童謡「月の沙漠」、世界の教科書を所蔵する五倫文庫とその精神、先人たちの行動が今に受け継がれる文化は御宿町の誇りです。

編集いただいたご労苦に感謝申し上げますとともに、この本を多くの方に楽しんで読んでいただきたいと存じます。

御宿町長 石田 義 廣

もくじ

親孝行な竹永志保	53
千人塚	47
御宿のキツネ	43
平司洞門	39
轟山の天狗	32
えびの腰はなぜ曲がったか	25
カニとカエル	18
星落とし	13
デーデッポ	6
民話マップ	5
刊行のことば	2



御宿海岸



「海女の群像」岩瀬禎之写真集より



日西墨三国交通発祥記念碑



『月の沙漠』記念像と記念碑



地曳橋

あとがき	「日西墨三国交通発祥記念碑」物語	北条時頼と御宿	海女と大あわび
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
96	71	64	58

民話マップ

- ① 親孝行な竹永志保
- ② 御宿のキツネ
- ③ カニとカエル
- ④ 北條時頼と御宿
- ⑤ 千人塚
- ⑥ 轟山の天狗
- ⑦ 日西墨三国交通発祥記念碑物語
- ⑧ 岩和田の大アワビ
- ⑨ デェーデッポ
- ⑩ えびの腰はなぜ曲がったか
- ⑪ 星落とし



デエーデッポ

一

おかし おかし、海と山にかこまれた御宿に、大男が住んでおった。背の大きさはどのくらいあったものか。立ちあがると、へそから上は雲をつきやぶり、あたまはお天道さまてんどうに届くかと思うほど大きな男だった。

御宿の人たちは、この大男をデエーデッポとよんでいた。デエーデッポはかた足をとどろきやま轟山とどろきやまにかけ、もうかた方の足をせんげんやま浅間山せんげんやまにかけて、あじろわん網代湾あじろわんで顔を洗う。すると、黒い雲がかかったように暗くなって、照りつけていたお天道さまが見えなくなってしまう。かわりにデエーデッポのおなかが空一面に広がる。広がった空に、暗く大きな穴が見える。デエーデッポのへそだ。



「見てみる、デエーデッポが顔を洗っている」

「暗くなって仕事もできねっぺ」

「おいねえこったな・・・」

あたり一面暗くなると、仕事はできなくなるし、御宿の人たちは困っていた。

一番困るのは浜の漁師たちだ。なにせ、網代湾にかた手を入れただけで波がたち、両手を入れると大波になるのだ。両手で海の水をすくって顔を洗おうとすると、ときには舟までいっしょにすくってしまふ。漁師たちは

「デエーデッポ、あぶねっぺおー」

という。すると、デエーデッポは

「わりい、わりい」

と言って、左の手のひらに舟をのせ、右の指で舟をつまんで、浜の砂の上にゆっくりとおいた。漁師たちは



「デエーデッポ、おいねこったな」

と言いながらも、デエーデッポが顔を洗い終わるのを待ってやった。顔からしたたり落ちる水は大雨のように落ちる。舟にもふりかかる。

顔を洗い終わったデエーデッポは、やがてお天道さまに向かつて顔をかわかす。顔のかわくころには、網代湾の波がおさまる。そうすると、浜においた舟を指でちよいとつまんで、また海に返してやった。

二

デエーデッポは、村の人に迷惑ばかりかけていたわけではない。デエーデッポのおかげで村の人が助かることもあった。なにが助かるって。そりゃ、なんといっても海が時化たときだ。舟で沖に出かけたとき、急に時化て海が荒れてくる。浜にもどろうと、けんめいに舟の櫓ろをこぐ。しかし、強い風と高波のために、舟はいっこうに進まない。それどころか、舟もろ



とも海の底に沈んでしまうことがいくどもあった。

ところがデューデッポが御宿に住むようになってから

は、時化ても舟の事故はなくなった。

海が荒れると

「デューデッポ助けてくれよー」

とさけぶ。すると

「どれどれ、どこだ」

「どこにいろんだよー」

と言いながら、大きなからだを小さくかがめて、荒れた海をじつとながめる。そうして、かた手で荒海から舟をちよいとすくいあげ、浜辺に運んでくれた。

こんなふうには、村の人とデューデッポはたがいに助け合いながら暮らしていた。



ところが、ある夏のことだった。その年は日照りが続き、川の水も沼の水も少なかった。

「デエーデッポ、おめえよ。水をもう少し大事にしろさ」

「日照ひでりということは、わかっていているだ。それで、おれもがまんしているだ。両手で飲んでいた川の水もかた手で飲んで、がまんしているぞ」

「かた手といっても、おめえのかた手はなん十人分の水だっぺよ。だからよ、指一本で飲んでくれ」

「指一本で、どうやって飲むんだ」

「おめえの指は川に入れただけで、村人五人分の水がしたたれ落ちる。わりいいが、もう少しがまんして

くれ」



「なに 指一本で……。そっじゃあ、おれは死ねということか」

「そんなことは言ってねっぺよ。ほんのちっただけがまんしてくれさ」

「がまんしてるっぺよ」

「たのおむからよおー。もうちっと、がまんしてくれさ」

「もう、がまんならね」

「……」

村の人たちと デェーデッポの言い合いは続いた。ついに
デェーデッポはおこって

「それじゃ、もうたのまねえ。おれがこの村を出て行く……」
はき捨てるように言って、大多喜の方に向かって行った。

そうして、おこって、めちゃくちやに足を踏みならしてあばれた。今も大多喜の山奥に、深い谷が多いのは、このときデェーデッポがあばれた足あとだそうだ。



その後、デーデッポは御宿に姿をあらわさなくなった。うわさによると、東京湾に出て、富士山をひとまたぎにし、さらに日本海をまたいで中国に渡ったとさ。

おしまい

絵 清水三枝

星落とし

御宿の夜空は美しい。

御宿海岸で見る夜空も、

浅間山せんげんやまで見る夜空も美しい。

このお話は、

御宿の夜空に輝く星の話です。

一

二

おかしむかし、御宿にはちごろう八五郎という男が住んでいました。
晴れた日のことでした。

八五郎は、村の人達に言いました。

「今夜、空の星を落とすから、見に来ないか」



「星を落とすって、そんなバカな・・・」

「知っているか。星は金きんでできているから、キラキラ光るんだ」

「ええ、金で」

「そうだ、金だ。金をひろいに来いや」

村の人たちは（そんなバカな。空の星なんか落とせるもんかと、半信半疑はんしんはんぎでした。

八五郎は

「うそというなら、来なくてもいいさ。・・・でも、後で後悔し

たって、知らねえぞ」

と言いました。

三

夜になりました。

御宿の夜空には、たくさんたくさんの星が、キラキラ輝いています。



昼間、うそだ、バカだと言った村人が、

八五郎の家に、やって来ました。

すると八五郎は、長い竹ぼうきを持って、
屋根にのぼりました。

♪

そーら、落ちろ、金の星

キラキラ光る 金の星

夜空の金を 手に入れりゃ

きょうから みんな長者様

四

八五郎は竹ぼうきをふりまわしました。

でも、星は落ちてきません。

八五郎は、疲れてきました。



「八五郎、早く落としてみる」

「ま、待ってろ」

竹ぼうきをふりながら、また歌い出しました。

♪

そーら、落ちろ、金の星

キラキラ光る 金の星

夜空の金を 手に入れりや

きょうから みんな長者様

見ている村人も、いっしょに歌い出しました。

♪

そーら、落ちろ、金の星

キラキラ光る 金の星

夜空の金を 手に入れりや



きょうから みんな長者様

やがて村人達は

「星なんか落ちるはずがねえ、帰ろうぜ」と言った、その時です。

流れ星がスーッと、落ちました。

八五郎は言いました。

「星を落としたぞ。さあ、ひろってこい。金持ちになれるぞーっ」

大声でさげびましたとき。

五

おしまい



カニとカエル

一

おかし、おかし。高山田地区の田んぼにカニとカエルがすんでいました。

カニは臆病もので、人が道をとおると

「おお、おそろしい。地震だ。地震だ」

といって、ふるえていました。

ところがカエルは、反対に、人が来ても、平気でした。

田んぼの中でも、道のまん中でも、飛びまわっていました。

♪

ぴよんこら ぴよんこら ぴよんこら ぴよん

ぴよんこら ぴよんこら ぴよんこら ぴよん

.....



カニは　とっても弱虫だ

だけど　カエルのおれ様は

こわいものなど　ありはせん

ぴよんこら　　ぴよんこら　　ぴよんこら　　ぴよん

ぴよんこら　　ぴよんこら　　ぴよんこら　　ぴよん

．．．．

ある夏の日だった。田んぼの稲はすくすくのびて、風にゆれていた。カエルが田んぼから出て、あぜ道を通って小川に行こうとしたとき、ぱったり顔を合わせました。

「やあ、やあ、カニさんカニさん。元気かい」

「あああ．．．。カエルさん。このとおり元気です」

と、カニはうつむきながらはさみをふってこたえました。カエルは弱虫のカニを見ると、からかいたくなりました。

「そうか、そうか。そりゃあ、けっこうなことだ．．．。」

「は、はい．．．。」

「ところでカニさん、こんど、馬が来るそうだ」

「馬が・・・」

カニは馬と聞いただけで、ぶるぶるふるえてしまいました。カニはあわをふきながら

「カエルさんカエルさん。そりゃ、ほんとかね。わしはこわいから、その日は穴の中に逃にげますよ」

といった。それを聞いたカエルは胸をはり、笑いながら言いました。

「へえ、カニさんはあいかわらず弱虫だね・・・。わしなんか馬なんて少しもこわくないぞ。馬がきたら、ピョンピョンはねてみせるわい」

「すごい。やっぱりカエルさんは、強いねえ」

カニさんは、うらやましそうにカエルさんの顔を見ました。



三日後のことでした。

田んぼの道を

パッカ、パッカ、パッカ

パッカ、パッカ、パッカ

・・・

と、馬のひづめの音が響いて来ました。

カニさんは、びっくりぎょうてん。

「うあー、こわい。こわい・・・」

と、田んぼの中をはいまわって、穴の中に逃げこみました。

いっぽう、カエルさんは

「わしにこわいものなどありゃしない」

と、道のまん中をいつものように





ぴよんこら ぴよんこら ぴよんこら

ぴよんこら ぴよん

ぴよんこら ぴよんこら ぴよんこら

ぴよんこら ぴよん

・・・

カニは とっても弱虫だ

だけど カエルのおれ様は

こわいものなど ありはせん

ぴよんこら ぴよんこら ぴよんこら ぴよん

ぴよんこら ぴよんこら ぴよんこら ぴよん

・・・

と、鼻歌を歌いながら、道を飛びはねていました。

パッカ、パッカ、パッカ
パッカ、パッカ、パッカ

・・・

と、いう音が通りすぎました。

穴の中で、ぶるぶるふるえていたカニさんは

「ああ、こわかった。まるで、地震のようだった・・・。それにしてもカエルさんは本当に強いなあ。馬といっしょにピョンピョコ飛びはねるとは」

と、言いながら穴からでて、道にはい出してきました。

「おや、カエルさんが見えないが・・・。いったいどうしたのだろう」

カニはあちこちはいまわって、カエルを探しました。

しばらくして、カニが叫びました。



「うあわー。どうしたことだ」

カニはおどろきました。道のまん中で、カエルがぺちゃんこにつぶれていました。

「あんなに強いカエルさんがつぶされるとは……。馬ってカエルさんよりも強いのか。それにしてもかわいそうに……」

カニは、はさみをふりながら、

ゴソゴソ　ゴソゴソ

田んぼにもどって行きました。

おしまい

えびの腰はなぜ曲がったか

おかしおかしのことだ。大地にはたくさんの獣^{けもの}が走り、空には鳥たちが飛びかい、海や川には魚たちが群^{むれ}をなして泳いでいたころのことだ。

夷隅^{いすみ}の山の中に、とても威張^{いば}っている鷲^{わし}がすんでいた。

「この世でおれ様が一番大きくて一番強い。すずめやつばめは小さくて弱虫だ」

「おれ様が空を飛ぶと、みんな逃げ回る。この前なんかおれ様が空を飛んでいたら、すずめの大群どもが逃げ回るではないか。それもチュチュウチウ鳴きながら散り散りに逃げおった。まったくだらしのない鳥だ」

と、自分の大きさと力の強さを自慢^{じまん}していた。

ある日、いつも空から遠くに見えていた海の方に行ってみようと思った。鷲は夷隅の山を



はなれ、御宿の海に出た。空は晴れ、青い海がどこまでも続いていた。

「さすが、山とちがって少しは大きな鳥がいるわ」

そう思いながら、白い鳥の群に

「お前たちは何という名前だ」

と、つつこんで行った。すると、

「私たちはカモメという名です。お助けを」

と、逃げまわった。

「ハハハ、弱虫だな」

と、高笑いしながら

「やっぱり、おれ様が一番強い」

「おれ様が・・・一番だ・・・」

と、うぬぼれた。

♪世界中で一番大きいものはだれ

そんなの決まっているさ
山で育ったこの鷲様だ

世界中で一番強いものはだれ
そんなの決まっているさ
山できたえたこの鷲様だ

どこに行ってもこの鷲様に
かなうものなどありやしない
おれは山で育った鷲様だもの♪



鼻歌を歌いながら、大きくなつばさをひろげて飛んでいた。鷲の姿を見ると、たしかにどの鳥も逃げた。鷲は調子にのってどんどん^{わき}どんどん沖に向かって飛んで行った。

「ああ、疲れた」

と、思った時には御宿の浜は見えなくなっており、遠くにとどろきやま轟山が見えた。

「むむ・・・沖にき過ぎたか」

あわてて向きをかえたが、もどっても、もどっても砂浜が見えない。

「疲れた、もうだめだ」

そう思ったその時だ。海の上に一本の黒いものが見えた。

「おお、助かった。あの木の上で一休みしよう」

鷲は木に向かって飛び、木に止まった。

その時だ。

「だれだ、わしの上に止まっているやつはだれだ」

と、おそろしい声が海の中から聞こえてきた。

「このおれ様を知らぬのか。世界中で一番大きくて強い鷲様だ」

鷲は大声でどなり返した。すると、鷲よりも大きな声で

「おまえが世界一大きいだと。何をぬかす。おまえが止まっているのはわしのひげだ。この

おれ様を見ろ」

と、大きな大きなえびが現れた。鷺が木と思ったのはえびのひげだったのだ。

「お許しを、えびさん、えびさんおまえさんこそ世界一大きくて強い。とてもかなわない」
鷺は御宿の浜に向かって必死に逃げて行った。

世界中で一番大きいと言われたえびは、すっかり気分がよくなって海の中をすいすい泳いだ。

♪世界中で一番大きいものはだれ

そんなの決まっているさ

海で育ったこのえび様だ

世界中で一番強いものはだれ

そんなの決まっているさ

海できたえたこのえび様だ

どこに行ってもえび様に

逆さからうものなどありやしない

わしは海で育ったえび様だもの♪

と、鼻歌を歌い、意気ようようと泳いだ。

やがて、夜になった。えびは

「今夜はこの岩穴で寝よう」

と、穴の中に入って行った。すると

「だれだ」

と、地響じびききのような声がした。

「おれ様か。おれ様は世界で一番大きくて強いえび様だ」

驚から世界一大きくて強い、と言われたえびはいばってどなり返した。すると

「ははは．．．。世界で一番大きいだと。なにをぬかしおる。お前が入っているのは、おれ様の鼻の穴ではないか。ははは．．．。」



笑いながら言ったのはクジラだった。

「動くな、動くな。おまえが動くとかすぐってえ」

と言ったかと思うと

ハ、ハッ、ハックション

と、クジラが大きなくしゃみをした。えびは

ピューン

と、吹き飛ばされて小波月こはづきの岸壁がんべきまで飛び、えび

は岸壁に思い切りぶちあたった。それ以来えびの腰は曲がってしまったとき。

おしまい



とどろきやま
轟山の天狗

おかしむかしのことだ。

いわわだ
岩和田の子どもたちが、おおぜいでとどろきやま
轟山に栗拾いに行った。腰
には、にぎりめしをつつんだ袋をぶらさげ、肩にはかごをかっ
いで、わいわいがやがや、話しながら山を登って行った。

天気はいい。山を登るにつれてながめはひらけ、太平洋がど
んどん大きく見えてくる。なんとも言えない、いい気分だ。

「わあー、舟が見える」

「海がキラキラ、光ってる」

「気持ちいいなあー」

みんな、あまりの美しさに、かんたん
感嘆の声をあげた。

登れば、登るほど視界がひらけ、やがて舟がいっぱい停泊した
ていはく



岩和田の漁港も見えてきた。ほした網も、網を繕う人のすがたも小さく見えてきた。

「わあーあれはおら家の舟だ」

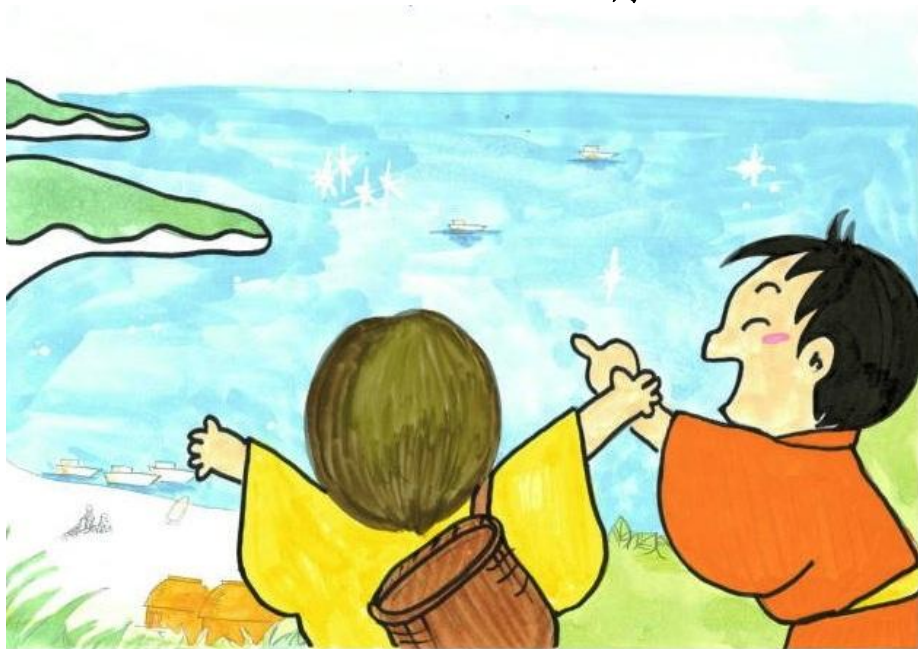
「見える、見える」

いっそう大きな声をはりあげた。左を見ると大波月、小波月の入りくんだせまい入り江が見える。紺碧の海には、岸に寄せる白い浪がキラキラ輝く。そして、紺碧の海に白い浪がたつ。海女たちが作業をしている。

どんどん登って行った。やがて、林に入り、大木に視界をさえぎられ海が見えなくなった。上を見ると空の青さだけが木々のすきまから見えた。

やがて、平らな草原に出た。そばには大きな大きな松の木がしげっていた。一人が

「ああ、腹へった」



と言うと、ほかの者も

「ずっと歩きっぱなしで、腹へったなあ」

と言う。

「こーらたへんで、にぎりめしでも食べっぺよ」と言う

「そうすべー」

「そうすべー」

と言って、松の根もとに腰をおろした。にぎりめしの入った腰のふくろに手をかけた時だ。

「ありゃー」

すっどんきょうな声が上がった。他の子たちも

「ねー」

「おにぎりかねー」

「おめえもか」



「ありゃー、いったいどで、落としたんだっぺ」

「おれのにぎりめしもねー」

ぺしゃんこになったふくろを、さかさにしてふってみた。

「たしかに入れてきたど」

「ふくろん口も、しばってあったさ」

「どに落としたんだっぺ」

おおさわぎとなった。不思議なもので、おにぎりがないと
なるとますますお腹がすいてきた。

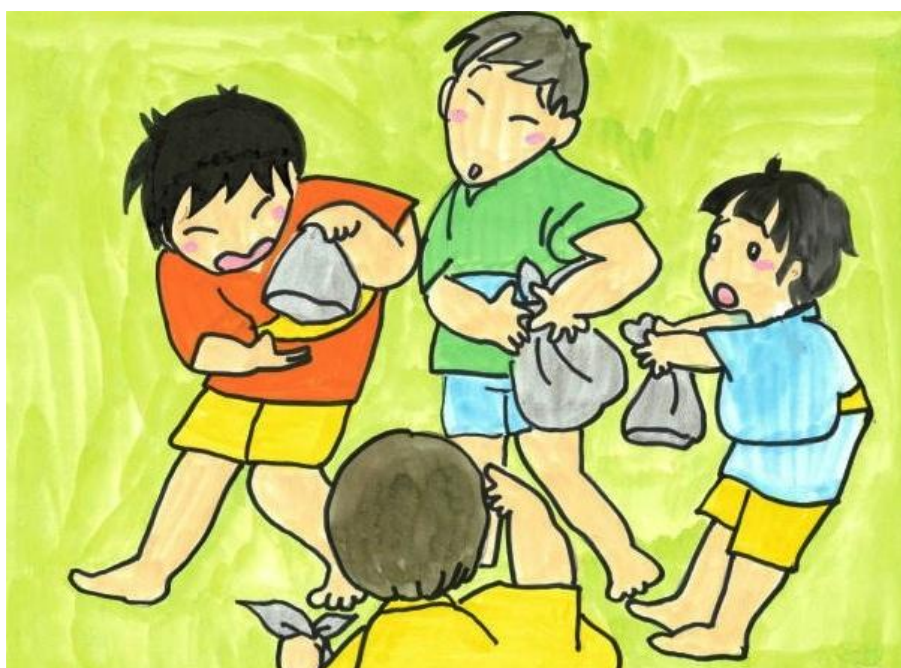
と、その時

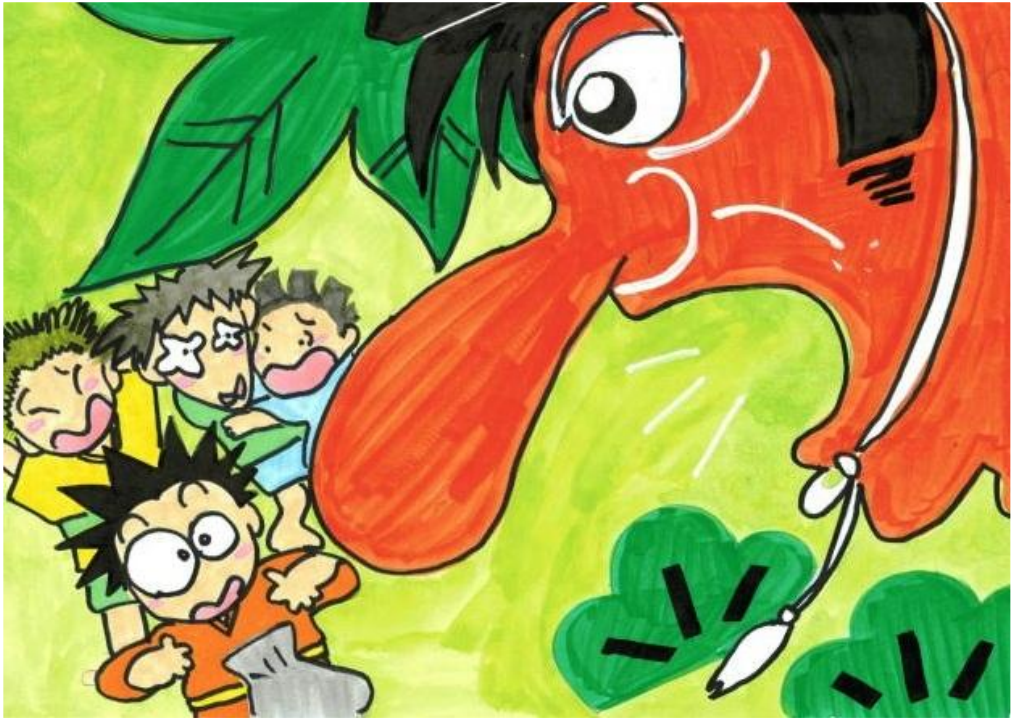
「やいやい。そこのガキども・・・」

かみなりのような大声が落ちてきた。

「だれの許しをもらって、この山に入った。ここはガキの
来る所じゃねえぞ」

松の上から大きな天狗が見下ろしているではないか。





「この山は俺たちの山だ。さっさとおりろ」

と言う。びっくりしたと言ったらありやしない。子どもたちは泣きそうになりながら走った。

しかし、間もなく疲れてしまった。すると天狗は

「ここは俺たち天狗の山だ。さっさと、おりろ。おりろ」

と叫びながら追いかけてくる。

「おりろ、おりろと言ったって、腹がへって、もう歩けね」

「なにっ、腹がへったって。それなら、これでも食べ」と、両手をさしだした。その手には、にぎりめしがのっている。

「.....」

「わあーにぎりめしだ」

「おれのにぎりめしだ」

みんなびっくりした。なぜ、おれのにぎりめしがと思うと、またうすきみ悪くなって、かけた。すると天狗は

「まて、まて、これを持っていけ」

と、にぎりめしをこどもたちに投げつけた。

「わあー」

「逃げろ、逃げろ」

と、山道をかけた。

ふもとまで、おりると

「わあー、おっかねえー」

「おっかねったなー」

・・・

と、言いあった。

「あれ」



またうすきみ悪くなって、かけ



轟 山

「あれ、あれ、おすびがあっど」

腰のふくろにはにぎりめしが入っていた。

こんな不思議なことが、おかしはよくあったそうだ。

おしまい

絵
清水三枝

平司洞門 へいじどうもん

『須賀』すか地区は、後ろが山で、前は海岸です。海岸の方は平坦な土地で農作業も容易にできましたが、山の方は谷が多く不便と困難をともなっていました。

この話しは、おかしむかし、と言っても今からおよそ七十年ほど前の須賀の話です。

一

少しでも多くの米の収穫を願って、山と山のわずかな平地も開墾かいこんされて田が作られました。田は水が命です。雨の多い年はいいのですが、少ない年は日照りになって谷間の田は枯かれてしまいました。こんな状況を見続けてきた神定平司かんじょうへいじは、水路を作って山の溜池ためいけから水を引くことを考えていました。連なる山をくりぬき、田まで水路を作るのです。平司はこの考えを周りの人々に説いてまわりました。

「谷あいの田んぼまで水を引けば、雨の少ない年でも稲は枯れません。毎年豊かに稲が実り

ます。みんなで水路を作りましょう。みんなが力を合
わせれば、簡単なことです」

水路のできることはだれもが望んでいましたが、山
を掘り水路を作ろうという者はいませんでした。しか
たなく一人で山を掘る決心をしました。溜池から谷あ
いの田までの地形を調べ、地図に水路をかきました。
そうして翌日から、クワとツルハシ、モッコを持って
山に出かけました。雨の日も風の日も続けました。こ
んな平司を見て

「あんやろうは、かわったやろうだ・・・」

「いつになったらできるやら、頭がおかしくなったのでは・・・」
と、ちよう笑し、変り者あつかいする人もいました。しかし、平司は必ず成功すると、一人黙々もくもく
と掘り続けました。

そうしてついに半年を費やして、一二〇メートルの地下水道をつくりあげました。それ以



来、谷間の田は日照りの年も枯れることなく、秋になると稲穂はたわわになるほどたくさん実をつけました。

二

また、浜から山間部の実谷地区じつこくに行くのには、峠を越えなければならず不便をしいられていました。農作物を運ぶのも、木材を運ぶのにも人の背を頼り、この峠を越えなければなりませんでした。この峠の下にトンネルができれば、楽に荷を運ぶことができます。時間もずっと短くてすみます。平司は山を掘りぬいてトンネルを作ろうと考えました。しかし、今度の仕事は人や馬が通れるようなトンネル作りです。半年や一年で終わる仕事ではありません。それを思うと、なかなか実行に移せませんでした。焦るのですが、年月だけが空しく過ぎていきます。周りの人達に相談しましたが、

「山をくりぬくのぞ、それもあのよように大きな山を」

「水路のようなわけにはいかねえぞ」

と、またまた反対されました。

周りのみんなを頼っていたのではだめだ、とにかく掘ってみよう、と昭和六年、山の岩壁

に挑いどみました。一人で黙々と掘り続けました。その姿はさながら江戸時代の禅海上人の『青あおの洞門どうもん』を連想させました。これを見た当時の町長さんは

「これほどまでに執念しゅうねんを燃やしているのか。町民のことをこんなにも考えてくれるのか」と、感動しました。そこで、陸軍の工兵隊こうへいたいに応援を求めました。

そうして、ついに昭和九年、三年五か月の月日を費ついやして完成しました。このトンネルのおかげで、山と海との交流よういが容易になりました。人々は長くこのトンネルを『平司洞門へいじどうもん』と呼び、感謝しました。

しかし、夷隅開発建設事業の造成工事のために「平司洞門」は姿を消してしまいました。かわりに平司の業績を後世に伝えるため、洞門の跡に碑が建てられています。

おしまい



平治洞門の碑

御宿のキツネ

おかし、布施^{ふせ}地区の人たちは、自分の畑でとれた野菜を持って、御宿の浜にでかけました。

舟が海から帰ってくると、獲^とれたイワシなどの魚と野菜を取りかえて帰ってきました。

布施を出て御宿の浜に向かう途中、弓折^{ゆみおりとうげ}峠がありました。

ある日、布施のおせんばあさんとおじょうばあさんが、野菜とふかしたイモを持って、御宿の浜に出かけました。舟からあがった新鮮な魚と交換して、帰る時^はでした。山の端^はにかたむいた真っ赤な夕日が二人を照らし、長い真っ黒な影をおとしていました。

峠まで来ると、陽が山の端に落ち、西の空は真っ赤です。もう少しで布施村ですが、先ほどから歩き通しで、すっかり疲れてしまいました。二人は西の空を見ながら、道祖^{どうそじん}神のそばに腰をおろしました。



「ああ、とうとう日が落ちてしまったか」

「だれか、迎えに来てくれないかね」

と話していると、布施村のほうから人影がやってきます。

目の前まで来ると

「おばあさんや、おばあさん。迎えに来たよ。さあ、荷物を持ちましょう」と言うと、荷物をかついで歩き出しました。

ばあさんたちは

「ありがたい。助かった」

と喜んで立ち上がり、若者の後をついて行きました。

しかし若者の足の速いことといったらありません。

「おい、おい。そんなに急いだらついていけねっぺさ」

「もう少し、ゆっくり歩いておくれな」

といいながら、若者のあとをハア―ハア―息をきらせながら追いかけてました。

おせんばあさんが

「おじょうばあさん、足の速い、あん若えしゅうはどんもんだな・・・」
と言いました。

「あらやだ。わしは、おまえさんの知りあいとばかり思ってたのに」

「それにしても、足の速いこと・・・」

若者との間は、どんだんはなれてゆきました。

「おーい。もう少しゆっくり歩いてくれ」

「待ってくれー。おめえはどんもんだ」

「おーい、待ってくれー」

あわてて叫びましたが、若者は早足でどんだん先に行ってしまった。

すると突然、若者の後ろ姿から茶色いしっぽのようなものが見えたかとおもうと、クルッと一回転しました。

「あれ、あれはキツネでねえか」



「そだ、キツネだ」

「やられたー」

おせんばあさんとおじょうばあさんは、思わず峠道にしゃがみこんでしまいました。
ススキの穂^ほが秋風にゆれていました。

おしまい

絵 清水三枝

千人塚

新町地区しんまちに、『千人塚せんじんづか』とよばれている、共同墓地があります。『千人塚』という地名の由来には、こんな話が語り伝えられています。

一

おかしおかし、元禄げんろく十六年（一七〇三）十一月二十二日のことでした。漁師たちは一日の漁が終わり、網代あじろの浜に舟をつけました。そして、今日の不思議な漁の様子を語り合っていました。

「きょうは大漁だ」

「こんな漁のあったのは、めずしい」

「魚が群れになって舟に向かって突進してくるんだ。それもすごい勢いでな・・・」

「網を投げ入れたかと思うと、たちまち魚でいっぱいになる」

みんな、大漁を喜んでいました。

「わしはこの網代の海で六十年も漁をしてい
るが、こんなことは初めてだ。何か、悪いこと
でもおこらなければいいが・・・」

古老は、不吉な予感がしました。しかし、網代
の浜は、大漁でわきかえっていました。

やがて、西の山に真っ赤な夕日が沈み、どの
家も、夕げのしたくにとりかかりました。はず
んだ明るい声が、家々から聞こえていました。

秋の終わりをつげる色あせた野菊の花が、夕風
にふかれてかすかにゆれていました。のどかな、網代の浜の秋の夕ぐれでした。

夕食が終わると^{いろり}囲炉裏を^{つくろ}囲んで網を繕ったり、^{わらじ}草鞋を作ったり夜なべ仕事です。やがて^{いろり}囲
炉裏の火もチョロチョロと弱火になると寝床に入りました。

夜中のことです。

コーコーコッコッコッコッコ



突然、ニワトリが鳴きだしたかとおもうと、すごい勢いで庭をあばれはじめました。ウオー
ウオー、ワンワンワンワン・・・ウオーウオー

犬も、鳴き始めました。あたりが、そうぜんとしたかとおもうと

グラグラグラグラ

突然、まさに突然、大地がゆれだしました。家の中では、たなの上の茶わんやなべが落ち、
土間の水がめがたおれて、水びたしになってしまいました。どの家からも

「おお、びっくりしたー。」

「地震だー、地震だー、地の神様がおこったぞー」

「なまずがあばれだしたぞー」

と、叫びながら人々が外へ飛び出してきました。

やがてゆれはやみました。屋根が落ち、大きくかたおいた家も少なくありません。庭の木
も傾いています。恐ろしさのあまり、乳飲^{ちのみ}み子は火がついたようにギャーギャー泣いてい
ます。その後、何度も小さいゆれ、大きなゆれをくりかえし、多くの家がつぶれてしま
いました。

翌朝をむかえました。東の海が、
かすかに明るくなってきました。紫
の雲が、ぶきみになびいていました。

「舟の被害はねえだろうか・・・」
漁師たちが、浜に舟を見に行ったと
きでした。紫色の雲のかなたから、
大きな波が、ゴーゴーうなりをたて
て、せまってくるではありませんか。

「うあー、お化けだー」

「波のお化けだー」

「逃げろ、逃げろ。波の化けもんだ

ー」

さけびながら、人家におかかって走りまわりました。波の速さはすさまじく、どんどん近づいてきま



した。あつという間に、陸に上げてあった、舟をのみこんでしまいました。海女小屋も、干してあった網も漁具も、すべて波にのみこまれてしまいました。

「助けてくれー、助けてくれー」

と叫び走る男も女も、老人も若者ものみこんでいきました。

どんどんどん内陸に向かっていきました。

「助けて、助けて・・・」

「おっかあー、おっかあー・・・おとうーおとうー」

助けを求める声、父母を呼ぶ子どもの声が、波間に消えていきました。

川を上ってきた波は、橋をのみこみ、畑をのみこみ、竜がのたうちまわるように、木や家を倒して進んでゆきました。それは、まさに地獄のような光景でした。

波の勢いが弱まったかと思うと、波はあつという間に引いてゆきました。波の引いていったあとは、水におぼれた人や、ひん死の人や無残な残骸があちこちに横たわっていました。

その後、網代の浜には死体がいく日にもわたって流れてきました。

この津波でなくなった人達をあわれに思い、浅間山のふもとに亡骸をなきがらほうむりました。そしてやがて、だれいともなくこの地を『千人塚』と呼ぶようになりました。塚はその後、現在の新町の共同墓地に移されました。以来、この共同墓地を『千人塚』と呼ぶようになりました。

おしまい



千人塚石塔

親孝行な竹永志保たけながしほ

御宿町布施地区ふせに、浅間様を祀まつった神社があります。国道からせまい山道を登って行くと、石碑が建っています。この石碑に、こんな話がいい伝えられています。

一

今から約二百年ほど昔のことです。布施村の百姓の家に、志保しほという親孝行な娘がおりました。貧しいながらも幸せな生活を送っていましたが、一番の働き手であった父が突然亡くなり、いっそう苦しい生活をしいられるようになりました。

志保は美しく心やさしい娘でしたので、お嫁にもらいたいという話がいっぱいありました。しかし、年老いた母を一人残して嫁に行く気にはなれず、お婿むこさんに来てもらいたいと心秘ひそかにおもっていました。

志保がちょうど二十歳のとき、隣村からお婿さんをむかえて結婚しました。お婿さんはた

いへん働きもので、一家三人で幸せな生活がつづきました。

ところが、この幸せな暮らしも長くつづかず、志保が二十九歳のとき働き者の夫が突然病で亡くなってしまいました。残された志保と母は、また貧しい暮らしを強いられました。

夫をなくした志保のところには

「まだ若いのだから再婚さいこんしたほうがいいよ。

おっかさんも喜ぶにちがいない」

「となり村に働き者がいるけど・・・」

「年とったおっかさんの面倒めんどうをみるのにも働

き手の男がいたほうが」

と、次から次へと再婚の話がまいこみました。

しかし、志保は

「お気づかいはありがたいですが、私はもう

結婚しません」

と言って、ことわりました。



女手ひとつで一家を支えなければならなくなった志保は、夏の暑い日も冬の寒い日も休まず懸命に働きました。

一方、母は年とともにもうろくしはじめました。

「わしは、きょうはそうめんが食べたい」

「今日は、魚を食べたい」

と、わがままをいうようになり志保を困らせました。志保は一里ほどはなれた街まちにでかけて、母の好物を買ってきて食卓にならべました。

母のわがままは、どんどんつってきました。そのうちに

「母さんは昼間ひとりぼっちでさみしい。せめて夜だけでもいっしょに話をしてくれないか」と、言います。昼間働いて疲れていましたが、眠いのをがまんして母の話を一つ、一つうなずきながら聞く志保でした。

ある冬の夜でした。母は風邪をひいて寝たきりの日が続きました。

そんなある日

「ウナギを食べたいなあ」

と、突然言いだしました。冬なのでウナギは手にはいりません。

「おっかさん、今は冬だ。ウナギなんてとれねえ・・・」

と、いうと

「なにいう。今は夏でねえか・・・。冬だなんて、志保はうそをつくのか」

すっかりぼけてしまった母でした。

志保は、ぼけてしまい寝たきりの母にウナギを食べさせたいと思いました。あれこれ考え

ましたが、この寒い冬にウナギが手にはいるわけがありません。

そこで、近くの真常寺しんじょうじの観音様かんのんさまにお願いに行きました。

「おっかさんがウナギを食べたいといっています。どうかウナギを・・・」

と、祈りました。すると不思議なことに

「志保、おまえはなかなか親孝行だ。おまえの願いをかなえてやろう」
観音様の声が聞こえたかと思うと、突然、二匹のウナギが志保の前にあらわれたのです。

「ありがとうございます。ありがとうございます。．．．」

志保がなんども頭をさげると

「これからも親孝行をなささい」

観音様の声がしました。

志保は喜んでウナギを持ち帰って料理をしました。母は

「おいしい、おいしい。こんなおいしいウナギははじめてだ」

と、喜びました。

やがて、志保の親孝行のうわさは領主の耳にはいり「世の女性の鏡である」と、たくさん
のごほうびをくださいました。石碑によると、志保は天保四年（一八三三）七十七歳でなくなりました。

おしまい



「孝女竹永志保」顕彰碑

海女と大アワビ

御宿町岩^{いわ}和^わ田^だの海に、大きな大きなアワビがすんでいました。大きなアワビといってもふつうは大人の両手を合わせたくらいです。ところが岩和田のアワビは、たたみ一畳もありました。あまりの大きさに

「これは、海の主にちげえねえ」

「海の神様だ。あの、アワビに近づいたり、とったりしてはならねえ」

「海の主だから触れてもならねえぞ。もしまちがって触れようものなら、大^{おお}時^{おし}化^けになるぞ」

と言われていました。だから、大アワビに近づく漁師はいませんでした。時化た日には、

「きょうは、大アワビにタコでも触れたんだっぺ」

と、うわさしました。

岩和田に、アワビやサザエ、テングサ、ワカメをとることを生^{なり}業^{わい}として、いる美しい海女が住んでいました。年頃で、近所の漁師と恋仲でした。いつも沖に舟を出すと、仲良く語りあ

っていました。

いつしか、二人は人目をしのいで、こっそり逢うようになりました。海女や漁師の間では

「あん二人は、できてるっぺや」

と、うわさされるようになりました。

ある日、朝から海が荒れ、漁に出ることができませんでした。男は娘に会いたくなり、彼女のもとを訪ね、一日中楽しく語りあいました。沖での語り合いは、漁をす

る仲間の目が気になりますが、だれも気にせず語りあうことができました。娘は（いいあんなべえに明日も海が荒れて漁ができねばいいなあ）と、心の片すみで思いました。しかし、翌日は海の荒れもおさまり、漁に出なければなりません。その翌日も空は晴れ、漁に出る日が続きました。晴れた日が何日も続くと、娘は海が荒れて漁が休めるのを心待ちにするようになっていました。しかし娘の願いとはうらはらに、晴天が続きました。

そんなある日、娘は（そうだ、大アワビだ。大アワビに触れれば・・・）と思いました。



しかし、小さい時から聞かされている、

「大アワビは神様だ。大アワビには近づいてはいけねえぞ」

と、いう言い伝えを思い出すと、大アワビに近づく勇氣はありません。でも一方、時化になると、好きな人と一日中語り合える、という思いもありました。

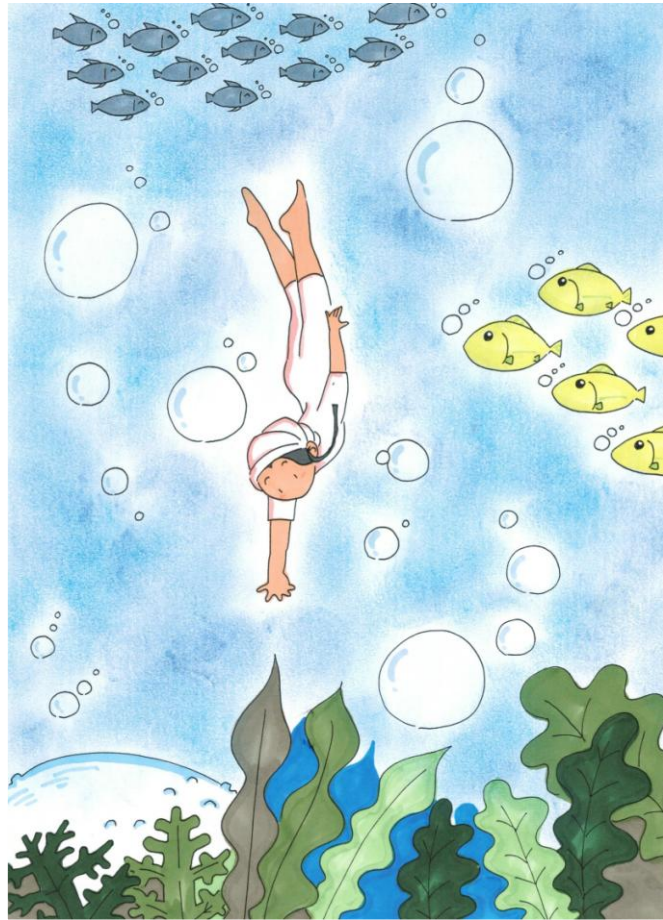
数日後、いつものように、仕事着を身につけ、磯がねを持ち、網袋のスカリを腰につけて海に出ました。いつもより早く出ました。仲間の姿はまだ見えません。白い砂浜を駆け出すと、いつの間にか大アワビのいる岩に立っている自分に気がつきました。あたりを見まわして、海に入りました。そうして、ぬき手で沖に向かって泳ぎだしました。朝日にキラキラ輝いている海にもぐっていききました。

娘は必死でもぐりました。七尋ななひろほどもぐると海の底です。海の底を見回しますが、海草ばかり目について、大アワビらしい姿はいっこうに見えませんが、海草を両手でかきわけ、さがします。でも見つかりません。そのうちに息が苦しくなりました。海面に出ると、ひと息大きく深呼吸して、また体をひるがえして海の中にもぐりました。今度も大アワビを見つけることができず、ただ小さな石をひとつひろって海面に浮かんできました。もぐっては浮かび、

浮かんではもぐるを繰り返しました。

・・・とうとう娘は大アワビを見つけました。話には聞いていましたが、大アワビは砂から出ている岩といった方がよいでしょう。海草の間から見えかくれています。娘は手にもった石を大アワビにたたきつけると、急いで浮きあがろうとしました。しかし手足をばたつかせる割には浮きあがるできませんでした。足を大アワビにつかまれるような気持ちでした。水面に顔を出すと、急いで岸に向って泳ぎました。娘が岸に着くと、さきほどまで晴れていた空が急に黒雲におおわれ、な風ぎっていた海面も高波にかわってきました。やがて、魚に出ることもできなくなりました。

その日、娘の所には漁師の青年がたずねてきました。そして一日中、二人は語り合いました。



その日から五日後。

娘は青年と逢って一日中話をしたい、という思いがまたまたつのって来ました。そこでまた、大アワビのすむ沖に行つて、石を大アワビに投げつける決心をしました。娘は石を左手に一個右手に一個拾うと、大アワビめがけて投げつけました。

娘が岸につくと、以前と同じように黒雲が空をおおい、風が吹き出し、雨が降ってきました。今だかつてないような嵐となりました。娘が家につくと、みんな大さわぎしています。

「今朝、暗いうちに出漁した男たちの舟がまだ帰ってきていない。急に天気がくずれるなんて」

と心配しています。娘の好きな青年も、今朝早く出漁しているということです。

娘は、好きな男を助けようと、荒海に舟をこぎ出しました。ところが、大アワビのすむあたりまでくると、舟が全然進みません。荒海の上をぐるぐるまわっているだけです。そこに、男の舟が帰ってきました。男は娘を見つけると、娘の舟に近づいていきました。ところが、女の舟は海底に引き込まれてしまいました。これを見た男は、荒海にとびこみ、娘のあとを追いました。舟の上では、男たちが見守っていました。二人とも浮かんできませんでした。



海女さん像（御宿駅）

やがて黒雲がサーッと流れ、青い空がひろがって、荒れた海は静まりました。
今でも岩和田の沖には大アワビがすんでいるそうです。

おしまい

絵 清水三枝

ほうじょうときより
北条時頼と御宿

一

上総かずさの国は菜の花におおわれていた。道ばたも、あぜ道も畑も、黄色に輝いていた。そんな菜の花畑の間を一人の僧がゆっくり歩いていった。

田園地帯が過ぎ、潮の香が春風にのって流れてくる。

「海に出るか」

大きく深呼吸して潮の香をすいこんだ。

坂道を登りきると、突然海があらわれた。紺碧の海が目の前にひろがった。僧は笠かさの縁ふちを持ちあげて海原をみた。あまりのまぶしさに目を細めた。水平線に目をやるとキラキラ輝いている。左に目を移すと断崖絶壁だんがいぜつぺき。岸壁に波がぶつかる。白い飛沫しぶきがおどり、キラキラ輝く。



「上総の海はもう春か」

僧はつぶやき、しばらくながめた。やわらかい風が汗ばんだからだに心地よく吹きつける。吹きあげてくる潮風に僧の袈裟けさがゆれている。

僧はまた歩きはじめた。魚の匂いがただよってきた。道は右手に折れ左手に大海原を見ながら歩く。右手は屋根の低い民家が肩を寄せ合うように軒をつらねている。深くしわがきざまれた老人が網を繕つくろっている。子どもたちがかくれんぼをしている。僧をみると、みんな頭をさげた。僧も立ち止まって深々と頭をさげながら通り過ぎた。

民家を過ぎると、また菜の花畑が道の両わきにあらわれた。道にそって黄色に輝く菜の花。春の陽ざしに色を濃くする大海原、暖かな潮風……のどかな上総かずさ地方である。

「気持ちよきこと」

僧は生きる喜びを感じながら歩を進めていた。

……一里ほども歩いたろうか。立ち止まった。額には汗がにじんでいた。今度は笠のひもをといて

「ほんとうに美しい春じゃのう」

とつぶやいた。ふところから手ぬぐいを取り出し、汗をぬぐいながら腰をおろした。そうして、また春の海に見とれた。

．．．しばらくすると、立ち上がって、笠をかぶり、ひもを結び、また歩き出した。

僧の名は最明寺入道北条時頼さいみょうじにゅうどうほうじょうときよりである。このたび將軍の位を退き、執権しつけんという位についたばかりである。執権とは若い將軍を影から補佐する役である。職を退いた、というがまだ二十九歳である。現役を退き、出家して諸国の様子を見聞しているのである。今は戦いくさのない平和な世の中であるが、いつ戦が始まるかわからない。ひとたび戦が始まれば、各地のご家人に頼らなければならない。そんなわけで、諸国のご家人の様子をごらんになっている最中なのだ。

しかし、きょうは景色の美しさに心をうばわれていた。

二

海が岩場から砂浜に変わった。三日月のように弧こをえがく浜辺、浜辺をかこむ松林．．．絵にかいたような景色だ。

山の端に陽が傾き、真っ赤な、真っ赤な夕焼けが広がった。海面も、小麦色の砂丘も、松林も、一日の漁の終わった舟も、みんな真っ赤にそまった。規則正しく寄せては返す波の音。静かな、静かな網代の浜。

「平和じゃのう」

と、つぶやいた。

「穏やかな暮らしじゃ」

美しい夕暮れに、今夜の宿のことも忘れていた。

ゴーン　ゴーン　ゴーン

暮れ六つの鐘が風にのって聞こえてきた。

「近くに寺があるようじゃ……。今夜はそこに世話になるとしようか」

名残惜しそうに、腰をあげ、鐘のなる方に向かった。

歩くと、寺の山門があった。山門をくぐると、山を背にした本堂と、庫裏が見えた。切り立った山には松林が広がっている。長年、海風に絶え、くねくね曲がった枝が寺を守るようにのびている。その枝を夕日がそめている。

「お頼み申す」

庫裏の玄関でさげんだ。

「どなたでございましょうか」

「ぶしつけない頼みですが、一晚泊めて
いただけないだろうか」

「お困りでございましょう。どうぞ、

どうぞお入りください」

庫裏に通された。

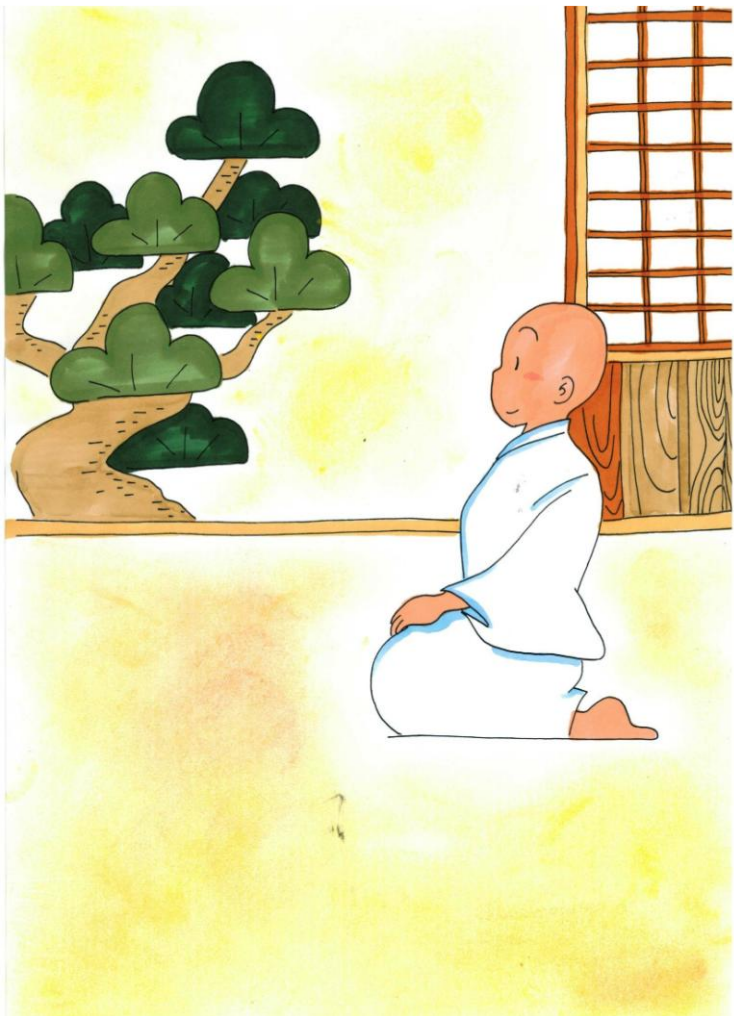
「どちらから、おいでなさいまし
た・・・」

「鎌倉からです」

「それは、それは、遠いところから」

「上総は、はじめてですか」

「はい、はじめてです。本当に美しい。
愚僧ぐそろうはこの海の景色が気に入りました」



「そうですか。私たちは見なれているせいかな、あまり感じませんが、そんなに感動していただきましたか。どんな所に心を動かされたのですか」

「そうですね・・・」

「菜の花畑もよかった、紺碧の海の色も、碎ける波も・・・夕焼けも・・・心を動かされました。中でも、この先の浜辺・・・あの浜はなんと言うのですか。ほんとうに美しかった」

「はあ、あの浜は網代の浜と申します」

「網代の浜ですか。弓状の白い砂浜に寄せる白波、目に焼き付いています」

「ああ、それに、この寺の松。夕日に照らされる松の枝ぶり・・・。戦のことを忘れさせてくれ心がなごみました」

時頼は、先ほどまで目にしてきた美しい景色に酔よっていた。

そうして、ふところから矢立やたてと紙を出した。筆の先を少し口にふくんで墨を付け、一気に書いた。

御宿^{みしゆく}せし

そのときよりと こと問^とはば^(わ)

網代の海と 夕影の松

「御宿」という名はこの歌から由来したと言われている。

また、最明寺^{さいみょうじ}入道北条時頼がこの寺に宿泊されたので寺の名は「最明寺」と命名^{めいめい}されたそう
だ。

おしまい

絵 清水三枝



御宿地名発祥の歌碑（最明寺）

につせいぼくきんごくこうつうはっしょうきねんひ
「日西墨三国交通発祥記念碑」物語

太平洋を見おろす とどろきやま 轟山に「日西墨三国交通発祥記念碑」と書かれた
高さ十七メートルの白い塔が立つ。この一帯を「メキシコ公園」と呼ん
でいる。また、駅前通りを「ロペス通り」と呼んでいる。

名前の由来には、御宿・スペイン・メキシコの友好親善の物語がある。

一

慶長十四年（一六〇九）七月。スペイン領フィリピン諸島の臨時総督
ドン・ロドリゴは任期を終え、ふるさとメキシコへ向かっていた。サン・
フランシスコ号は三本マストの白い帆に夏風をいっぱいを受け、二隻の
船をしたがえ北上していた。昼は青空、夜は満天の星空であった。

晴天と順風にめぐまれた航海が続いた。ロドリゴも乗組員も、ふるさと



ロペス通り碑



日西墨三国交通発祥記念碑

とメキシコに残してきた家族との再会を一日千秋いちじつせんしゅうの思いで船を進めていた。

この天候なら予定より早くメキシコに到着すると、誰もが思っていた。

二

しかし、良い天候は続かなかった。波がうねりだした。海はにぎり、やがてどす黒くかわっていった。(台風にぶつかったか)とロドリゴは思った。マストはミシミシと不気味な音をたてた。嵐がおさまり、天気
が回復してくれることを誰もが祈った。

しかし、翌日も、また次の日も大嵐が続いた。乗組員たちは

「雨や風は神さまの贈り物さ。広い、広い太平洋、時には嵐もあるさ……」
と不安な気持ちをはらった。

何日もの間、船は大きな波のうねりにいく度も、もち上げられ、うち
落とされた。サン・フランシスコ号にしたがって来たサンタ・アナ号と
サン・アントニオ号を見失い、船団はばらばらになってしまった。



ゴーゴーゴー……

不気味なうなりとともに、船が大きく傾いた。

「だめだ、帆柱を切り倒せー」

船長の命令が出た。海に投げ出されないように、綱で体を結んで斧おのをふるった。

ドドドー

と三本の帆柱のうち一本が倒された。船は木の葉のように、波のうねりに身をまかせただけだった。食糧しよくりようも連日の雨でくさり、悪臭をはなった。粗末な食糧と疲労のために、みんな精も根もつきはてていた。

三

九月三十日。フィリピンを出航してから六十八日目の夜であった。

ギギギー　ギギギー

ガガー　ガガー

船底をかきむしる不気味な音が響いた。その時であった。

ドーン

という音とともに船が傾いた。乗組員は転がり、甲板かんばんにいた者は夜の海にほうり出された。

「座礁ざせうだ」

「岩に乗り上げてしまった」

「助けて・・・」

「神さまー」

悲鳴が船中にあがった。

みな一睡もせず、海にほうり出された仲間を探した。そのうち夜が明けてきた。助けられた仲間もいたが、わずかだった。朝もやの中、無惨に傾いた船体は、幽霊船ゆうれいせんのようだった。これでこの世とお別れ、船とともに海の底に沈むと誰もが思った。

「おお、神よ。我らを見はなされたのか」

「神さま・・・」

やがて、霧が流れ視界が開けた。



「陸だ。陸が見える・・・」

興奮こうふんした声が、甲板に響いた。

「たしかに陸だ」

「どこの国だ」

「無人島か」

「神は我々を見はなされなかった。おお、神さま・・・」

乗組員たちは陸の出現に喜び、神に感謝した。

乗組員の一人が丸太につかまって陸をめざして泳ぎだした。続い

て五人、六人・・・十人、二十人・・・と懸命に陸をめざした。

小麦色の砂浜に泳ぎつくと、あたりを見回した。遭難した乗組員が泳ぎ着いた所は、御宿の田尻たじり

海岸であった。

「小屋がある、小屋が。人が住んでいるにちがいない」

粗末な小屋をみつけた。小屋には着物や漁の網が干してあった。

「ここはジパングだ」



田尻浜

「この衣服はジパングのものだ」

「助かった。これで食糧も・・・船の修理も・・・」

ロドリゴはほっとした。

なぜなら慶長十二年（一六〇七）スペイン領フィリピンの日本人

町で暴動が起き、多くの日本人が捕らえられた。その時、臨時総督

だったロドリゴはこの日本人たちの命を助け、日本に送り届けたの

だ。もしかしたら助かるかもしれない。神様がここに導いてくださ

ったのだ、と思った。天を仰いで十字をきった。

四

浜に下りてくる女たちがいた。女たちは驚いた。ボロボロの衣服をまとった男たちが倒れてい
る。沖には生まれて初めて見る幽霊船のような異国の船。女たちはあわてて引き返した。ふたた
び姿を見せた時には数人の男たちが一緒だった。村長むらおきと思われる威厳のある男が、ゆっくり山を
下りてきてロドリゴの前に立つと、ていねいに頭を下げた。男につられ、ロドリゴも頭を下げた。



上陸記念碑

一行には一人の日本人が同乗していたので、幸い言葉は通じた。

「まだ大勢の乗組員が船に残っています。助けてください」と助けを願った。

救助作業が始まった。座礁している船に向かって若者たちが小舟をこぎだした。みな漁師だ。海のことにはよく知っている。次から次へと飛び込み、船に残っていた者、海に漂っている者を小舟に乗せて岸に向かった。一方、陸では女たちが火をたき大きな鍋に湯をわかし、飯をたき始めた。

五

「ううう・・・」

海から引き上げられた乗組員がうめき声をあげ、砂浜のあちこちに倒れこんでいる。

「しっかりしろ。助かったのだ」

「こら、眠っちゃだめだ。起きろ」

漁師たちは必死にゆさぶった。しかし声をかけても反応がない。

それを見ていた一人の女が走ってきて、ぐったりしている大きな男に近づいた。今にも息が絶えそうな乗組員を裸にして、乾いた布でこすり始めた。心臓のあたりを必死にこする。しかし、反応がない。

突然、女の一人が自分の着物をぬいで裸になった。そして、瀕死ひんしの大きな男を抱き、口をつけ息を吹きこむ。

やがて女の気持ちを通じたのか、大きな男は、かすかにうめき声をあげた。

「う、ううー……」

息をふきかえした。すると、見ていた女たちがほかの瀕死の乗組員のもとへ走った。ぐったりした大男たちを裸にし、先ほどの女がしたように体をこすった。そして、自分が裸になって男たちを温め、口をつけ、息を吹きこむ。瀕死の大男たちは次々に息をふきかえした。

「おお、神さま……」

「神は我々を神の国にお導きくださった」

ロドリゴは喜びの声をあげた。

サン・フランシスコ号の乗組員は三七六名であった。そのうち生存者は三一七名、死体収容数

一六名、行方不明者四十三名であった。神がロドリゴ一行を導いた地は千葉県御宿町岩和田である。人口三百人にも満たない貧しい村であった。

六

「寒いだろう……。かわいそうによう……。海の方この故郷には家族もいるだろうに」

村人は同情し、貴重な綿入れを惜しげもなく遭難者に着せた。遭難者は村の中央にある寺に集められた。寺の境内では大きな鍋に野菜と海の幸の入った汁とにぎり飯がふるまわれた。乗組員たちは夢中になって食べた。おかわりもした。

「おいしいか。腹いっぱい食べろ」

腹をすかした異国人たちに微笑んだ。異国人たちも

「おいしい、おいしい。ありがとう」



と満面の笑顔でこたえた。

村一番の大きな建物である大宮寺だいぐうじでも、五十人ほどしか収容できない。村長は村人に宿を願った。しかし、紅い髪、高い鼻、見たこともない大男たちが同じ屋根の下で寝るかと思うと

「何だか鬼のようだね。おら家げには小さい子どももいるし、泊めるのだけは・・・」

と異国人を宿泊させることをためらう人もいた。村長は言った。

「何を言う。異国人だろうが同じ人間だ。髪や目の色は違うが、切れば赤い血の出る同じ人間だ。困った時は互いに助け合う、それが岩和田のならわしじゃないか」

村長の言葉にみんなうなずいた。

七

岩和田村でスペインの船が座礁し、異国人を助けたことはその日のうちに大多喜城おおたきじょうに知らさ



遭難者救助の絵

れた。すぐに重臣たちが集められ評議が行われた。

「異国人たちを斬って捨てるがよかろう」

「異国人をすべて斬りすてねば、後々悔いることになる」

「いや異国人といえども、われわれと同じく人である。殺してはなるまい」

「いやいや、大きな事件が起きてからでは遅すぎる。ことが起こる前に斬り捨てるがよかろう。

十数年前に異国の船がわが国に漂着した時は異国人を処刑したという前例もござろう」

「いや、命をとることだけは・・・」

「いや、面倒なことが起きる前に斬り捨てた方が・・・」

・・・

意見は対立した。

八

大多喜城主ほんだただとも本多忠朝は、スペイン船座礁の知らせを江戸の徳川秀忠とくがわひでただに送った。秀忠は、時の最高権力者である駿府城すんぷじょうの父家康いえやすに伝えた。

一方、城主忠朝は異国人の様子を視察する使者を岩和田村に遣わした。戻ってきた使者たちは異口同音いくどうおんにこう述べた。

「異国人は確かに髪は紅く目は青く天狗のような鼻をしておりますが、とても礼儀正しく友好的な人たちです。みな疲れきって抵抗すらできません。村人に危害をくわえることはなかるうかと思えます」

やがて、家康から秀忠へ、秀忠から忠朝へ

「異国人を温かくもてなすように。間違っても殺したりしてはならぬ」という指示が届いた。

九

数日後、二十七歳の忠朝は三百人の家来をしたがえて、岩和田村にやってきた。異国人が抵抗したり、はむかってきた時に備えて家来は鎧兜よろいかぶとを身につけ、槍やりや火縄銃ひなわじゆうをたずさえていつでも交戦できるようにしていた。

ロドリゴたち三一七人も、この威厳に満ちた若きリーダー本多忠朝に自分たちの生死がにぎら



大多喜城

れているかと思うと緊張した。しかしロドリゴは前スペイン領フィリピンの総督として毅然とした態度で忠朝一行と面会した。

最前列に控えていたロドリゴは忠朝を見ると、日本の習慣にのっとり深々と頭を下げた。忠朝は隊列を止め、馬を降りロドリゴに近づいた。頭を垂れていたロドリゴの手をとり、忠朝はその手にキスした。周りの者たちは驚いたが忠朝は（ロドリゴよ、お主が日本の礼儀を心得ているようにわしも西洋の礼儀を知っているぞ）という思いを表した。忠朝が礼をわきまえた人物と知ると、ロドリゴの緊張は少し和らいだ。ロドリゴは先ほどよりさらに頭を低く垂れて、敬意の気持ちをしめした。

「航海の途中嵐にあわれたとか、さぞ大変だったであろう」

「はい、たくさんのお金銀財宝を失ってしまいました。しかし一番大事な命だけはこの通り残っております。神がこの国に導いてくださったのです」

「さようか。この国の食べ物に合いますか。あなたのお国では牛や鶏など動物の肉を食されると聞いております。私からの贈り物です。受け取ってください」

忠朝は生きた牛、鶏や果物、酒、着物を送り、さらに記念に日本刀を贈った。そしてロドリゴ

に

「乗組員一行の体力と気力が回復するまで滞在してください、十分なもてなしはできませんが、困ったことは何なりとおっしゃってください」

と、にこやかに言った。続けてそばに控えていた村長むらおきに言った。

「よくぞ異国人を救助した。忠朝、礼を申す。食糧はじめ生活に必要なものは、惜しまず与えよ」

「かしこまりました。村民一同おおせにしますがいます」

忠朝はさらに続けた。

「船からの漂着物を拾った時はすぐに届けよ。けっして私物化してはならぬ。もし私物化した者がいたら罰する。このことを村人に申し伝えよ」

忠朝の声は威厳に満ちていた。

十

秋晴れの十一月六日、体力も回復したロドリゴ一行は忠朝が待つ大多喜城へ向かった。途中いくつもの小さな集落を通った。どの集落でも紅毛あかげの異国人を見ようとする人であふれた。およそ

五里（約二十キロメートル）の道のりで、陽が西に傾いた頃に大多喜に到着した。

「あれは何だ」

「あの光り輝いているものは」

一行は山の頂にそびえる城の天守閣てんしゆかくに目をうばわれた。天守閣の白壁としやちほこ鯨しやちほこが夕日に輝いていた。通訳の日本人が誇らしげに説明した。

「お城です。殿様が住んでいるところです。岩和田村に大勢の兵を率いてきた本多忠朝様のお城です」

ロドリゴ一行はその美しさにしばし見とれた。

旅の疲れを癒いすため、城下の旅籠はたごで休憩した。その頃の大多喜は人口一万二千人の房総一の城下町だった。異国人をひと目見ようとする人々でごったがえした。

休憩の後、一行は旅籠や商家の並ぶ通りをぬけ、大手門おおももんをくぐり、山の頂にあるお城に向かった。城門じやうもんをくぐると堀がある。堀には大きな橋がかけられていた。ロドリゴ一行が渡り終えると太い綱によって橋の片方が引き上げられ、城門は閉じられた。敵の侵入・攻撃に備えての跳ね橋である。堀は深く城壁も高い。城壁の上には火縄銃を持った兵が百人ほど立っている。

百メートルほど進むと、また大きな門があった。先ほどと同じように跳ね橋があり、槍を持った兵たちが並んでいる。第一の門と第二の門の間には野菜畑や田んぼがあった。籠城戦ろうじょうせんになった時、食糧に困らないためだ。一行はこの広場で待たされた。ロドリゴと他に五人が城中に招かれた。城は天井、壁には金箔銀箔きんぱくぎんぱくがあしらわれた豪華な住まいであった。城の外に目をやると秋色にそまった山々と整然と並んだ萱ぶき屋根かやの家々が見える。蛇行した夷隅川が見える。夕日にそまった美しい城下町であった。

十一

夜は酒とごちそうでもてなされた。膳ぜんには魚、猪の肉、山菜、果物が並び、最高の客人をもてなす料理であった。

「日本の酒は口に合いますか」

「はい、日本の酒は美味しいです」

「それはよかった。喜んでいただけたか」

「この大きな魚は何という魚ですか」

「これは、ここ夷隅川でとれた鯉という魚です」

「コイ・・・」

「はい。鯉です」

鯉は大多喜の名物であった。江戸時代、参勤交代さんきんこうたいの時大多喜からの土産は鯉であった。当時、紫鯉ちんちようといって珍重された。

「日本の酒によく合いますね。じつにおいしい魚だ」

「さようでござるか。異国の人のお口にも合いますか」

互いに酒を酌くみ交かわした。

やがて忠朝が立ち上がった。

「今宵こよいはうれしい。わしはロドリゴ一行に日本の舞まいを披露ひろうする。鼓つづみをもて」

扇を手に忠朝は鼓の音に合わせて舞った。

忠朝が舞い終わると今度はロドリゴがすつくと立ち上がって

「このように歓待かんだいしていただきありがとうございます。今度はお礼に私の祖国メキシコの踊りを披露します。さあ、みんなも立って」

と言うと乗組員たちが立ち上がって歌いだした。リズムに合わせて勢いよくステップをふんだ。武士たちも手拍子をした。やがて共に立ち上がって陽気な歌に合わせて踊りだした。

十二

大多喜滞^ち在十日目、岩和田に上陸してから四十八日目の十一月十七日、駿府城から家康の使者がやってきた。この使者にロドリゴ一行は驚いた。何と髪は紅く目が青い、腰に刀をさした侍であつた。名は三浦^{みうら}按針^{あんじん}、ウィリアム・アダムスというイギリス人である。ロドリゴは武士の格好をしているこのイギリス人を警戒した。なぜなら、当時スペインとイギリスは世界各地で勢力争いをしてきたからだ。ロドリゴは漂着者、一方アダムスは時の最高権力者家康の重臣である。ロドリゴはアダムスに命運をにぎられていた。しかし、アダムスはロドリゴに温かく接した。ロドリゴもライバル国イギリス人といえ、アダムスの温かい人柄^{あんど}に安堵した。アダムスは家康からロドリゴ一行の便宜^{べんぎ}をはかるよう記した朱印状^{しゅいんじょう}を託^{たく}されていた。

一、海岸に打ち上げられた品々はすべてロドリゴに与える。

一、駿府城^{すんぷじょう}に向かう間、旅の安全を保証し食糧の支給を約束する。

というものである。

十三

十一月の晴れた日、ロドリゴは忠朝からもらった駿馬しゅんばに乗り三一七人の乗組員と共に約二十里（約八十キロメートル）の道を江戸に向かった。大多喜城では一行を迎えた時のように、槍や弓を持った兵三百人、火縄銃を持った兵百人が見送った。城下でも大勢の町民が手をふって見送った。忠朝と重臣たちは別れをおしみ城下のはずれ、駒返こまがえし坂ざかまで見送った。

「大変お世話になりました。見送りはここまでにしてください。別れがなくなります」
ロドリゴは目をうるませ、忠朝と重臣たちに対して礼を述べた。

「どうか気をつけて旅をしてください。みなさんと一緒に過ごしたことを決して忘れません」

「殿様の慈愛じあいに満ちたお心、心のこもった歓迎の宴うたげ……。あの魚、鯉こいと言いましたか。あれはおいしかったですね」

「ははは、鯉ですか。喜んでもらえて私もうれしい」

「貴殿の国の歌と踊りは楽しかった。もう一度歌って共に踊りたいのう」

「タラッタ　ラッタ　タ　タラッタ　ラッタ　タ・・・ですか」

「いやいや、殿の舞こそ素晴らしかった」

二人は楽しかった出来事を思い返した。

駒返し坂を過ぎ、下りになった。刈り入れの終わった、田んぼが広がっていた。忠朝と重臣たちは駒返し坂からいつまでも手をふった。ロドリゴ一行も何度もふり返って手をふった。ロドリゴは二十七歳の若きリーダー、忠朝が治める大多喜藩がさらに豊かに繁栄することを祈った。

江戸までの道中はどこでも、手厚いもてなしを受けた。一行は朱印状しゅいんじょうの「旅の安全を保証し、食糧の支給を約束する」という内容を思い出し、家康の力の偉大さを知った。

十四

江戸に入って三日後、江戸城の徳川秀忠えっけんに謁見した。その後、家康の住む駿府に向かった。家康はロドリゴ一行を厚くもてなし、フィリピンで日本人を助けてもらった礼を述べた。ロドリゴはスペイン国家の代表として、家康に次のような願いをした。

・日本国でのカトリック教徒の保護をしてほしい

・ 日本に寄港するスペイン船の保護をしてほしい

・ 日本からオランダ人を追放してほしい

オランダ人を追放するという申し出は受け入れられなかったが、あと二つはかなえられた。

その後、家康はロドリゴ一行がメキシコに帰るための船を建造し、ロドリゴ一行は慶長十五年（一六一〇）八月スペイン領メキシコに向け浦賀から出航した。

十五

その後、慶長十六年（一六一一）スペイン政府はロドリゴ一行を助けてくれたお礼として、前マニラ海軍司令官ビスカイノを特使として日本に遣わせた。家康や秀忠、伊達政宗などの有力大名に謁見した。この時、徳川家康に時計を献上した。レプリカの時計が現在、御宿町役場玄関に展示されている。



家康に贈られた時計のレプリカ
(御宿町所蔵)

二年後、慶長十八年（一六一三）九月慶長遣欧使節団として伊達政宗の家臣、支倉常長が率いる一行が宣教師ルイス・ソテロの案内でメキシコに向かった。

十二月十六日、メキシコ、アカプルコ港に入港した。その後スペインに行き、支倉常長はマドリードでキリスト教の信者になった。さらにイタリアのジェノバ、ローマのバチカンに行き、法王パウロ五世に会った。そこで日本との交易について話し合ったが実現はみなかった。

余談だがこの使節団のうち何人かの日本人がスペインに向かわずにメキシコに残り、メキシコの女性と結婚したと伝えられている。

十六

その後、日本はキリスト教禁止、鎖国の時代に入り、この漂着・人命救助の出来事は歴史の中に埋もれてしまった。しかし、明治になり不平等条約改正のため欧米を歴訪した岩倉具視いわくらともみ一行が訪問先でこの美談を聞き、再び歴史の表舞台に登場することになった。

明治二十一年（一八八八）に日本とメキシコは修好通商航海条約しゅうこうつうしょうかいじょうやくを結んだ。この条約は日本が欧米と初めて結んだ平等条約である。御宿の人たちの献身的な救助、大多喜城主本多忠朝の



支倉常長

人類愛に満ちた精神が平等条約を結ぶ要因になったのかもしれない。

昭和三年（一九二八）、夷隅郡上野村出身の報知新聞記者藤平権ほうち

一郎いちろうがこの出来事に感動し、その後、日本・スペイン・メキシコの友好を記念して、「日西墨三国交通発祥記念碑」が建設された。

昭和五十三年（一九七八）八月三日、大多喜町と御宿町の友好親善

団一行がメキシコを訪問した。その時、大多喜町はクエルナバカ市、

御宿町はアカプルコ市と姉妹都市協定を結び、末永い友好親善を深め

ることを誓い合った。

同年、十一月にはメキシコ大統領ロペス・ポルチーヨが大多喜町と

御宿町を訪れ、三六九年前のお礼を述べた。大多喜町民も御宿町民も江戸時代にロドリゴ一行を

もてなしたように大統領を温かく迎え、友好親善を深めた。

これを記念として御宿町には「メキシコ公園」、大多喜町には「メキシコ通り」がつくられ、

昭和五十三年のメキシコ大統領来町を今に伝えている。

昭和六十二年七月三十日〜八月二日にはメキシコ少年野球団一行が、軟式少年野球世界大会

一行が、軟式少年野球世界大会



欧米使節団

(I B A) に出場する際に御宿町を表敬訪問した。

平成九年十月には御宿町からメキシコ親善訪問団がクエルナバカ市やアカプルコ市を訪問し友好親善を深めた。以後二回の親善訪問団がメキシコを訪問した。

十七

その後、平成二十一年(二〇〇九)はサン・フランシスコ号が御宿沖で座礁してから四百年が経過。御宿の住民や大多喜城主本多忠朝がメキシコの人たちを助けた出来事を記念した式典や事業が行われた。四百年前にサン・フランシスコ号が御宿沖に姿を現したように平成二十一年六月十二日、メキシコ海運省の訓練船が御宿町網代湾に寄港し、「海の騎士」と呼ばれる帆船クアウテモック号が美しい姿を現した。

小・中学生・町民は漁船に乗り、沖に停泊している美しい帆船を間近で見学した。その後、御宿町、大多喜町で歓迎式典が行われた。



クアウテモック号

「三百人以上の人々を救ってもらった英雄的、人道的、人類愛に満ちた歴史をメキシコ国民の全員が忘れない・・・」
と、ルイスカバニャス駐日大使があいさつし、四百年前の人命救助に感謝の言葉を述べた。

十八

御宿町では日本最初の水難救助発祥の地としてライフセービング大会が行われている。

冬には御宿、大多喜間をたすきでつないで走る「ロドリゴ駅伝大会」が毎年開催されている。こうして、四百年前の人類愛に満ちた話が今なお伝えられている。

おしまい



献花式

あとがき

私たちの祖先は、日ごろ生活している山や海や川、田や畑に自分たちの暮らしを結びつけながら、民話を生み出してきました。天狗や巨人の話に托たくして社会の決まりや自然への畏敬いけいの念を教えたり、笑い話で横暴な人をからかってうっぷんをはらしたり、欲張りや利己的な者のあわれな末路を語って互いにいましめあったり、歴史上の人物にふるさとを結びつけて心の支えとしてきました。

私たちはこうしたふるさと御宿町の民話を聞くにつれ、祖先が何を喜び、何を悲しみ、どんな夢や願いを持って生きてきたかを感じることができます。民話が地域の、ふるさとの貴重な文化遺産と言われる理由です。しかし残念なことに民話が語られる場面が少なくなってきました。原因は核家族化、科学の発達、合理的な生活様式の普及・・・等によると思われる。

「御宿町合併六十周年記念事業」が町民に公募されました。記念事業アイディアに応募したところ、幸運にも採用されました。

本誌に掲載した民話は主に「夷隅民話の会」という民話愛好会で作っている冊子や機関紙から転載したものを

です。町民のみなさんが聞いた話と異なる作品もあると思います。話の内容が異なるのは、民話は語り手や書き手の思いや願いによって、少しずつ変化していくからです。それがまた、民話が「民衆の話」と言われる理由でもあります。間違いだとか嘘うそという世界ではありません。

この冊子を契機に、「私の聴いた話はこんな内容だった」「この冊子には載っていないけど、こんな民話もあるよ」「私の地区に、私の家にこんな話が語り伝えられているよ」と、ふるさと御宿の民話や祖先の足跡が話題になれば、私の提案が採用された意義が出てくると思います。ぜひ、そうなって欲しいものです。そしてまた「御宿ふるさと民話続編」が制作されることを願ってやみません。

最後になりましたが、ご協力いただきました方々に深く感謝申し上げます。

平成二十七年五月吉日

齊藤弥四郎

参考図書

『御宿町史』御宿町役場

『房総の民話』高橋在久 未来社

『房総の伝説』高橋在久・荒川法勝 角川書店

『ドン・ロドリゴ物語』金井英一郎 新人物往来社

『夷隅むかしむかし一集〜七集』夷隅民話の会 他

編著者紹介

齊藤弥四郎（さいとう やしろう）

一九五〇年生まれ。千葉県公立小・中学校勤務、御宿小学校を最後に退職。

現在夷隅民話の会会長・日本民話の会会員

著書

『夷隅郡の昔ばなし』『外房文学のふるさと』『童謡・月の沙漠と御宿町』

『日本・メキシコ友好物語』『夷隅地方の民話1集〜9集』『中学生物語』

『いすみ鉄道民話の旅』『絵本・大多喜水道物語』他

御宿町合併60周年記念

御宿ふるさと民話

発行日 平成27年 9月 1日

発行 御 宿 町

〒299-5192

千葉県夷隅郡御宿町須賀1522

電話 0470-68-2511

編著者 齊藤 弥四郎



おんじゅくまち